

上棟式と組物の由来譚の背景

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

建 築の祭儀は種々あるが、なかでも上棟式は建築物の基礎が完成した節目に、永久の安穩を祈念する最も重要な儀式とされている。この式の際に人形や櫛、鏡など女性の装身具などを祀る例が報告されており、その由来が組物などの建築工法の由来と合わせて全国各地で語られている。その中でも有名な飛騨高山の国分寺七重塔と、京都の千本釈迦堂（大報恩寺）に伝わる話をみてみたい。

まずは飛騨高山の国分寺七重塔だが、聖武天皇により諸国に国分寺の造営が命じられ、飛騨国でも腕ききの棟梁がこれにあたった。しかし、弘法も筆のあやまりか、大切な柱を短く切ってしまった。落胆していると、事情を察した棟梁の娘が、「杵組」で寸法を補えばよいと工夫をさずけた。すると見栄えもよくなり、立派な七重塔が完成した。しかし、女の入れ知恵が露見することを恐れ、棟梁は娘を殺してしまった。遺体は国分寺境内に埋められ、その場所から現在も残る樹齢一二〇〇年の大銀杏が生えたといい。ちなみに、飛騨国分寺に七重塔はすでになく、江戸期の三重塔が現存する。

なので、「おかめ顔」の像が境内に建てられている。こうした組物の由来に、「後にたたりが……」などと加えられると、上棟式に女物を祀るいわれとなる。私がこれらの話を知ったとき、なぜ娘や妻が死なねばならないのか、よくわからなかった。感謝こそすれ、死ぬなどもつてのほか。ましてや、殺すなどありえない。おそらく多くの人は、私と同じ感想をもつのではないか。

伝説が成立し、後世に伝えられるためには、たとえ荒唐無稽な話でもその時代、その土地の人々に「あるかもしれない」と受け入れられねばならない。これらの話が成立した背景には、頑迷固陋な職人気質を描くとともに、男尊女卑の思想が反映されているに疑いない。しかし、四十代半ばの私が違和感を抱くぐらいだから、すでに現代にはそぐわない物語になりつつあるのだろう。

これを今風にアレンジするとどうなるか。ある所に腕のいい大工がいた。しかし、腕自慢が鼻につきうとまれていた。ある時、大事な柱を短く切ってしまう、こまり果てていると、妻から組物の工夫を授けられ、恥をかかずにすんだ。その後、夫は妻に頭があがらなくなり、自慢話も影をひそめたので、かえって人受けがよくなった。こんなところか。

安倍内閣は経済成長戦略として「女性が輝く日本」を掲げている。建設分野でも女性を優遇する企業を評価する検討を始めているという。将来、女性が建設分野でますます活躍するようになれば、これらの由来譚も仕損じた夫の代わりに妻が出張って、新工法で建築を完成させ、それを讃えて上棟式に女物を祀るようになった……というオチに代わっていくのかもしれない。



千本釈迦堂のおかめ像

【交通】千本釈迦堂へはJR京都駅から市バス「50」（立命館大学前行）上七軒下車 徒歩約10分
／飛騨国分寺へはJR高山駅から徒歩約10分